



1 神話から哲学へ —自然哲学者たち

▶ pp.24～27

アルケー —自然哲学の祖タレス

タレスは万物の始元を水であるとした。そして世界は生きた（生命をもつ）ものであり、神々（ダイモーン）に充ち満ちているとした。また彼は、一年に四季の区別を見出し、一年を三百六十五日に分けたと言われている。[……]

彼はあるとき、星を観察するために、老婆を伴って家の外に出たが、溝に落ちてしまった。そこで大声で助けを求めたら、その老婆はこう答えたというのである。「タレスさま、あなたは足下にあるものさえ見ることがおできにならないのに、天上にあるものを知ることができるとお考えになっているのですか」と。

（ディオゲネス・ラエルティオス，加来彰俊訳

『ギリシア哲学者列伝』（上） 岩波文庫）



2 知と徳をめぐる問い —ソクラテス

▶ pp.27～31

無知の自覚

私は、知恵があると思われる人の一人を訪ねました。可能ならそこで神話を論駁して、

神の託宣に対してこう示そうと思ったのです。

「この人が私より知恵ある者です。あなたは、私がそうだ、とおっしゃったのですが」と。

そこで、その人をよく吟味しながら——名前を挙げてお話しする必要はないでしょうが、政治家の一人でした——その吟味で次のような経験をしました。アテナイの皆さん、その人と対話をしていて、私にはこう思われたのです。

「この人は、他の多くの人間たちに知恵ある者だと思われ、とりわけ自分自身でそう思いこんでいるが、実際はそうではない」と。……

私は帰りながら、自分を相手にこう推論しました。

「私はこの人間よりは知恵がある。それは、たぶん私たちのどちらも立派で善いことを何一つ知ってはいないのだが、この人は知らないのに知っていると思っているのに対して、私のほうは、知らないで、ちょうどそのとおり、知らないと思っているのだから。どうやら、なにかそのほんの小さな点で、私はこの人よりも知恵があるようだ。つまり、私は、知らないことを、知らないと思っているという点で」と。

（プラトン，納富信留訳『ソクラテスの弁明』

光文社古典新訳文庫）

よく生きること

ソクラテス 愛する友よ、して見るとわれわ

れは多衆がわれわれについていうことをあまり気にせずに、ただ正と不正の専門家が、あの一人だけが、そうしてまた真理そのものが、いうことを顧慮（こりよ）しなければならないわけだね。すると第一に君の主張で正しくないのは、正や美や善やその反対に関して、われわれは多衆の意見を顧慮しなければならないといったことである。だが、しかし多衆はやっぱりわれわれを殺すことができるのだよ、といって抗議する人があるかも知れないね。

クリトン それもちろん明らかだ、ソクラテス、きっとそうやって抗議する者もあるだろうよ。

ソクラテス 君のいうことはもっともだ。が親愛なる者よ、それでもわれわれが今述べた主張は従前同様に妥当だと僕には思われる。それから次の事も考えなおして見てくれたまえ、一番大切なことは単に生きることそのことではなくて、善く生きることであるというわれわれの主張には今でも変りがないかどうかを。

クリトン むろんそれに変りはない。

ソクラテス また善く生きることと美しく生きることと正しく生きることとは同じだということ、これにも変りがないか、それともあるのか。

クリトン 変りはない。

(プラトン、久保勉訳
『クリトン』『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫)



3 理想主義的なあり方 —プラトン

▶ pp.32 ~ 34

エロースとイデア

さて、正しい少年愛を通して、この美の姿が見えはじめる。そうなれば目的にたどり着いたも同然。エロースの道を正しく進むとか、誰かによって導かれるというのは、このようなことを指す。すなわち、さまざまな美しいものから出発し、かの美を目指して、たゆまぬ上昇をしていくということなのだ。その姿は、さながら梯子(はしご)を使って登る者のようだ。すなわち、一つの美しい体から二つの美しい体へ、二つの美しい体からすべての美しい体へと進んでいき、次いで美しい体から美しいふるまいへ、そしてふるまいからさまざまな美しい知へ、そしてついには、さまざまな知からかの知へと到達するのだ。それはまさにかの美そのものの知であり、彼はついに美それ自体を知るに至るのである。

(プラトン、中澤務訳『饗宴』 光文社古典新訳文庫)



4 現実主義的なあり方

—アリストテレス

▶ pp.35 ~ 37

習性的徳と習慣

だから明らかにまた、＜性格の徳＞はどれ一つとして、自然によってわれわれにそなわるのではない、なぜなら、自然によって存在するどのようなものも、他のあり方をするように習慣づけられることはありえないからである。たとえば自然によって下方に落ちるようになっている石は、たとえ人が一万回これを上方に放り投げて習慣づけようとしても、その方向に動くように習慣づけることはできないのであって、また火を下方に動くように習慣づけることもできず、その他およそ自然によって一定のあり方をするいかなるものも、そのあり方と異なるあり方をするように習慣づけることはできないのである。それゆえ、もろもろの＜性格の徳＞がわれわれにそなわるのは、自然によってではなく、また自然に反してでもなく、むしろそれらの徳を受け入れうる資質をわれわれがもっているからであって、習慣を通じてわれわれは完全なものになるのである。

(アリストテレス、朴一功訳『ニコマコス倫理学』
京都大学学術出版会)



5 幸福をめぐる問い

—ヘレニズムの思想

▶ pp.37 ~ 39

自然と調和して生きる —ゼノン

このゆえに、ゼノンが最初に、……(人生の)目的は「自然と一致和合して生きること」であると言ったのであるが、そのことは「徳に従って生きること」に他ならなかったのである。なぜなら、自然はわれわれを導いて徳へ向かわせるからである。……それゆえに、自然に従従(ずいじゅう)して生きることが(人生の)目的になるわけである。すなわちそれは、各人が自分自身の自然(本性)にも、また宇宙万物の自然にも従っているということであり、そしてその場合には、共通の法が……通常禁止していることは何ひとつ行わないということなのである。

(ディオゲネス・ラエルティオス、加来彰俊訳
『ギリシア哲学者列伝』(中) 岩波文庫)

快楽主義 —エピクロス

快が目的である、とわれわれが言うとき、われわれの意味する快は、——一部の人が、われわれの主張に無知であったり、賛同しなかったり、あるいは、誤解したりして考えているのはちがって、——道楽者の快でもなければ、性的な享樂のうちに存する快でもなく、じつに、